

婦人と子供たち

第五卷
第十一號

謹 告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なる時は、記者に應するものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育、幼兒保育の状態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手説歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡て左の規則によるこ

とす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべきし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

本會 告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會へ向け何ヶ月分か纏めてお納めの上、申込まれると、雑誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たゞ雑誌だけ買って御読みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵稅が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十八年十一月二日印刷
同 年十一月五日發行

不許
復製

編輯者 東京市麹町區飯田町四丁目十二番地
東京市神田區錦町一丁目十九番地
印 刷 者 東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印 刷 所 女子高等師範學校附屬幼稚園内
發 行 所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地
昌

大賣捌所 東京 東京堂●同東海信文合資會社●同北陸館

婦人と子ども第五卷第十一號目次

卷首

これはお前に上げようね、

子ども

金次のはなし……………やまとの翁一頁

東一の手紙……………五

いそつぶのはなし……………六

不思議な物語……………太田龍東譯七

考へもの……………三

婦人と子ども

子どもの特性につきて……………尾田信忠三

実驗上の育兒法……………醫學博士瀬川昌耆口述二
貞一の日記……………その母三九

松茸料理の一節……………石井泰次郎四一

交際につきて……………吾妻四三

婦人と親族法……………太田英隆四五

短歌募集及披露……………眞宮起雲五〇

俳句端書集……………鹽野奇零五一

同憲會……………小林雨峯五二

桑港のわびす五六

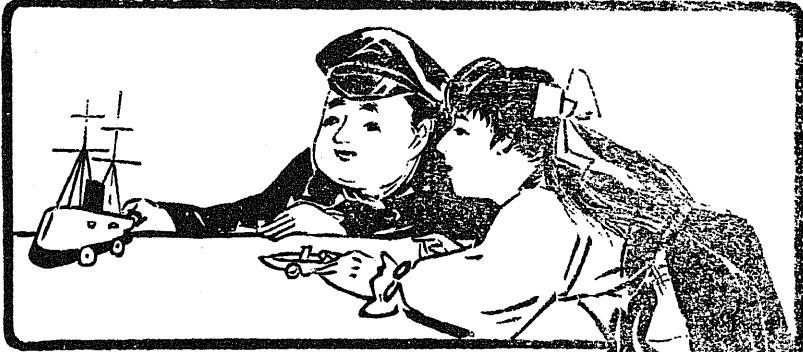
保育者のため

東京保母養成所に於ける澤柳局長及岡事務官の演説の大要六四

會報



これはお前に上げようね



婦人と子ども

第五回拾壹號

もど子

金次のはなし (つづき)
やまとの翁



さて金次は獨り残つて、お畫の用意をして居ますと、以前の小人が、又何處からともなくすまことに這入つてきて、そして前の様に、お畫を少しきれないかと

言ひます。金次は「はあ、此奴だな、毎日の様にやつて來ては、子分共を苛めるのは」と思ひまして

「やるものかい、取りたければ腕づくで取つて見るがいゝや」と申しますと、小人は不意、金次の首を目がけて飛びかゝって参りまするのを、金次は、忽ち身をかはして、小人を取つて抑へて、すぐ用意の細引を取つて、後手にしばつて、庭の大木に身動きの出来ぬ様に、しつかりとくくりつけました。

「さあ、どうだい動けるなら動いて見い」

と言つて、又元の處へ歸つてせつせと用意をして居りました。

其中に三人の子分が歸つて参りました「どうだらうな、金次先生も強いには違ないが、小人に遭つては叶ふまいぜなど言ひながら、

家に這入つて見ると、何も乎もちやんと出來て、金次は平氣な顔
で待つて居る。三人は
でしたか

と尋ねますと、金次は

「さてくお前達といつたら、から意氣地が無いじゃないか、なん
だあんな小人に善い目に遭つてさ、まあ飯でも食べて、庭へ行
つて見ろい」

と申しますので、さて暫くして四人で行つて見ますと、これは不
思議、あれほどしつかり縛つて置いた小人の影も形もございません
ん、夫許りか縛り付けた二抱へもある大木までが見えない。四人

はこれには驚きました。小人は、其大木を根引にして後手にくらられた儘、引きづつて走つて行つて仕舞つたのであります。そこで四人は、



「それ追っかけろ」といふので、木を引きずった跡を目宛に追つかけて参りますとだんく山奥へ深く這入つて行つて、とうく深い深い洞穴の處で、跡が見えなくなりました。

金次は

「や、此中だく、幸ひ、此處に籠と綱とがあるから、己は一番これに乗つて洞穴へ下りて見よう、貴様たちは上に居て、己をつり下げて呉れるんだよ」

と言つて直用意にかかりました。

「然し、己が下から綱を引いたら最後、すぐに引き上げて呉れんければ行けないよ」

と言ふので、金次は大きな刀を腰にさして籠の中に這入りますと、「よしきた」と言ふので、三人は、深い穴の中へ金次をつり下げました。

さて、金次は眞闇な穴の中を下へ下へとつり下げられて行きまし

たが、とうく底に届いたので、いきなり飛び下りて見ると、俄に其處等は明るくなつて、丸で闇から晝に變つた様です。これは妙だと思つて見渡して見ると、其處は奇麗な野原で、畑には菜の花が奇麗に咲き亂れて居る、此方の方には美しい谷川がちゃぶちやぶと流れて居る、そして直前には、立派な城門が立つて居ます。

「こりやいよく妙だわい」と思つて、幸ひ門が開いて居ましたから、ずんく其中に這入つて参りますと、中には年の若い美しいお姫様が、たつた一人立つて居りました。そして不思議相に金次を見て居りましたが、やがて、

「お前さんは誰だから知らないが、此處は人間の来る處ではない、此お城の主人は八頭の大蛇といつて、それはく強い恐ろしい妖

怪の様なもので私は、いつぞやから、此處に盜まれて來たものだが、お前さんは早く歸らないと、飛んだ危い目に遭ひますよ」と親切に言つてくれました。これを聞いて金次ば、

「こりや面白い、それでは其大蛇と一緒に勝負をして、お前様の身を助けて上げよう、なあに八頭だらうが、九頭だらうが、己に取つては世の中に恐ろしいものなしだ」

と言つて、じつと待つて居りました。暫らくすると、さ一つと一

吹き大風がやつて來たと思ふと、城門も引っくり返り相な大きな音がして、にゆーっと顯はれて來たのはかの八頭の大蛇です。金次を見るといきなり血の池の様な八つの口を開けて、剣の様な歯をかつくくと皆一所に噛み合はしてやつて來た。金次は少し

も騒がず。

「己は金次だ、さあこゝで勝負をしよう」

と言ふと、大蛇は

「小癪なことを言ふ、少し足りない様だが、貴様を晩飯の御馳走に食べてやらう」

と言ふので、八の口から一様に火の様な舌をペロリと出して、金次を目がけて飛びかかるを、金次は右にかはし左にかわして戦

つて居ましたが、とうく八つの頭を一々斬り落して仕舞つた。

先き程から、心配相にこの勝負を眺めて居た、お姫様は、首尾よく大蛇の殺されたのを見て、いきなり金次の側に来て、涙を流して喜んで居りましたが、やがて

「幸ひ私丈は助けられましたが、二人の妹はまだこの奥に捕はれて居ます、そこには、この大蛇よりも、もつとく強い恐いのが居るのでですが、どうかお序にこれもお助け下さいます様に」と申しますから、金次は宜しい、大丈夫助けて上げ様」と言ひますと。

「お姫様は、大層喜んで、奥から一本の金の鞭を取つて来て、これは大蛇の寶物ですが、これを持つて居れば隨分不思議なことも出来ます、助けられたお禮に、これを進上致しますから、試しに、一度この城を打つて御覽なさい」

と申しますので、金次は、何氣なく受け取つて其通りして見ます、立派な大きな城が、忽ち小さな林檎の實に代つて仕舞つたので、金次は、「なる程これは妙だ」と言つて、其林檎を懷に入れて仕舞ひ

ました。

さて、金次は、又お姫様に案内せられて、奥の城へやつて参りました。其處には、妹姫が一人捕はれて居たのですが、今姉さんが金次を連れて見えたのを見て、非常に喜んで、すぐ奥へ行つて、大蛇のシャツを持つて来て金次に着せました。このシャツには不可思議な力があつて、誰でもこれを着るといふと、以前よりも二倍も強い人になれるといふのです。さて、金次は其下着を着て待つて居ると、忽ち其處等が動き出して來たと思ふと今度は、十二の頭の大蛇が、恐ろしくうねり出して來ました。然し、金次は、彼のシャツで以て、以前より倍も強くなつてゐるのですから、何の苦もなく十二の頭を悉く斬り落しました。そして其お城も亦、林檎に

代へて仕舞つて、懷の中に入れて仕舞つた。

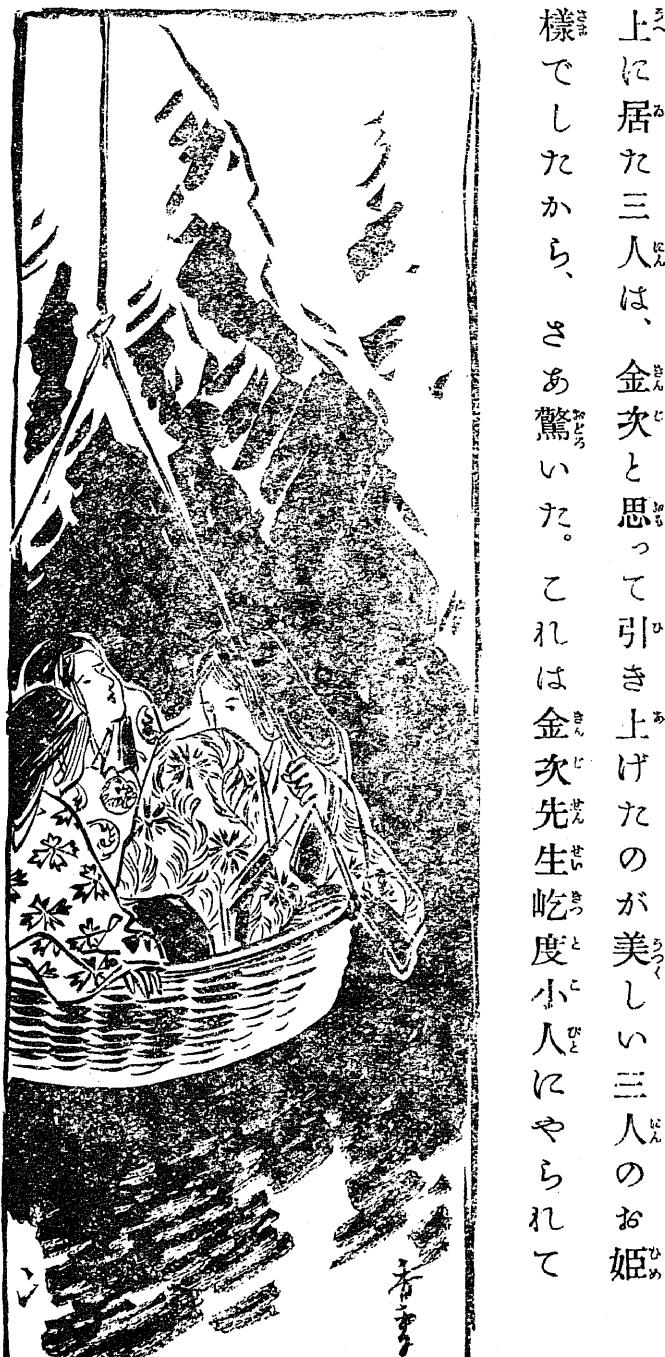
さて今度は、いよいよ第三の城へ向ふことになつて、二人のお姫様に案内せられて行きました。この城に居るのは、十八の頭を持つてゐる大蛇だと申すことです、然しこの大蛇が時々、地面の上に出る時は、たゞ一の頭丈が行く、其一つの頭といふのが、即ち前の小人なんです。金次はお姫様から、それを聞いて、「さては」と思つて、待つて居ますと、其處に捕らはれて居たお姫様は、大急ぎで奥から、一つの頭巾を持って来て金次に呉れました。この頭巾を冠ると、十層倍の力が付くといふことなのです。暫くすると、奥から眞黒い雲が起つて来て、天地も壊れ相な大きな響を立てゝ出て來つたのは、其大蛇です。金次はこれを見て、

「やあ、金次を見忘れたか 前はよくも逃げ居つたな、今度こそは逃がさない。さあ尋常に勝負しろ」

と言ひますと、大蛇は悟しろ

といつて、恐ろしく十八の頭を振り立てゝ金次を目がけてやつて来るのを金次は、片端から其頭をことく打ち斬つて仕舞つて、さてこの城も林檎に變へて懷中にに入れました。

そこで、首尾よく大蛇を退治して、三人のお姫様を連れて、洞穴の出口まで戻つて来て、先づお姫様を三人一度に籠の中に入れてさて合図をしますと、上から忽ち引ぱり上げました。

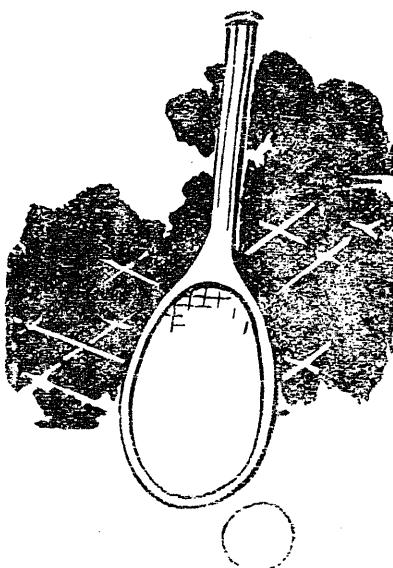


仕舞つて、小人が三人のお姫様に化けて吾々をも引き下しに來たのだなと思つて、一度に逃げようとしましたが、お姫様たちは周

章て、譯を話しましたので、「そうだったか」と初めて安心して、又籠をつり下げて、金次を引き上げました。

そこで、金次は無事に穴から戻って出て、さてお姫様達を各自の家へ送り届けて、自分は元の處へ来て、懷中から三の林檎を取り出して、夫を金の鞭で以て又元の立派なお城に返して、そこで三人の家来と一所につまでも面白く住んで居りましたといふことです。めでたしく





東一の手紙

久しぶりで、東京のよーすをおしらせいたします。
先月はなか／＼にぎやかで、おもしらうございま
した。第一番には、英吉利の艦隊が横濱に集つて
來まして、十三日ころからその歓迎がなか／＼盛
でした。司令長官はノーエル大將で、この方は四
十年程前に、一度日本へ來た人で、其時は少尉で

あつたのだ相です。

夫がすむと二十二日には、東郷大將の凱旋がありまし
た。新橋から二重橋までは丸で人の山で萬歳
々々といふ聲は天にまで響き渡つたと思ひます
東郷さんは眞實にえらいねー、君。

すると其翌日は觀艦式で、東京中の學校は皆ふ休
になつたのですよ、そして僕の兄さんは朝の二
時から歩いて東京から六里程もある鶴見といふ所
まで行つて拜観しに行きました。僕も行きたくつ
て行きたくつて、お父さんに隨分ねがつて見たが、
子供が行つては危いといつて、どうしても許して
くれませなんだ。僕は大層不平をいつて見たが、
後で兄さんに聞いて見たら、それこそ人で人で、
子供などはとても濠車にも電車にも乗れない位だ
つたといふ事だつたから、行かないでよかつたと

思ひました。けれども、夫から一週間は、日本の艦隊百七八十艘もあるんですよが、まだ東京灣に居て、軍艦の中を誰にでも見せて下さる相だから近い中にお父さんに連れてつて貰ふ約束をしました。

夫から駆船式の翌日は、東京市中の東郷大將歡迎でね、君、これが又大層なものでしたよ、凱旋門なんて立派な門が、新橋から上野までの間に幾つも出来て居て、東郷大將は立派な花馬車に乗つて、其を通られると、其道筋には何十萬といふ、人が出て萬歳／＼といつてお迎ひをする、上野ではぼーんぼーんと、煙火が何百本となくうち上げられる、町中國旗と提灯とで飾つて居る、こんなに勇ましいのは、僕が生れてから、始めての様だつたよ。眞實に東郷さんは、えらいねー、君

こんな風で、先月は中々忙がしかつたのです。今度の日曜日には、僕はお父さんに、園子坂の菊人形を見につれて行つて貰ふ積りで、其次の日曜頃には、兄さんに、瀧の川へ連つて下さいと頼んでるのです。そしたら、又其事をかいて君にお知らせしませう。さよなら。

十一月五日

西藏君

東

一

いそつ ぶの話

狐が鶴を困らせてやらうと思つて、ある晩、ごちそーをするからといつて、自分の家へ招びました鶴はどんな御馳走か知らんと思つて、喜んで行きましたが行つて見て、弱りました。甘し相なお汁

を、平つたい皿にうすべつたく入れて、さあどうぞと狐が出して來たのですもの、鶴の長い嘴では、どうして夫が吸へるものですか。

鶴は大そう夫を殘念に思つて、何でもこの敵討をしてやらうと思つて、夫から何日か経つて、狐を招びました。狐は、それとは知らずに何心なく行きましめた所が、今度は、口の細長い大きな瓶の中に入、いろんな御馳走を入れて、「さあお上り」といつて出されました。狐は食べようにも口が這入らない。鶴は、夫では私が一人で食べますといつてあります。鶴は、夫では私が一人で食べますといつて出されました。狐は食べようにも口が這入らない。鶴は、夫では私が一人で食べますといつて、細長い嘴を瓶の口にさし入れて、一人でみんな食べてしまひましたとさ。

不思議な物語（承前）

太田龍東譯

第四、話の話

ある國の王子に大層狩を好み方がありました。父王は其王子が狩に出るとときは澤山な従者を附けて出すばかりでなく、保護の爲め大臣も従はさせ王予を見失ふことのないやうに注意させました。ある日王子は例の様に従者を連れて狩に行きますと、鹿が一疋飛んで出ました。王子はこの鹿を追ひながら深く山奥に分け入り、大臣なども后からついでくること、思ひ、鹿を追ふ獵師山を見すと云ふ謡の如く、他も見ないですんと、山の中に入りました。すると鹿は森の中に駆け入つて姿が見えないやうになつたので、殘念に思つてその邊をしきりに探かしても一向知れません。仕方がない

十七

から歸らふと思つて后を見ますと從者は一人もゐません、これは失策だと思つて馬を急がせて元來

た道へ歸へりましたが、どうしたのか路に迷つて

或は荆棗の中或は嶮岨と彷徨てゐますと、一人の

美しい女が出て来て

『御身は只一人何所の里に御出でなさるか、若しや山路に迷つたのではありますか。』

と尋ねますから、王子も

『私は山路に迷つたのですが、貴女も只一人この山中に何してゐなさるですか。』

と問ひますと、美女は

『卑妾は印度王の一女であります、今日馬に乗つてこの山中に遊びに参りました所、俄に眠くなつたので、傍に馬を置いて芝生の上に假睡して目を見ましても、馬は何所へやら行つて仕舞つ

て只妾一人残されて、木から落た猿のやうにこにゐるのでムいます。』

と涙を流して最と哀れに語りますから、王子も可愛想に思つて、

『女の身で山中に迷つたら嘸御困りでせう、貴女の宿まで送りますから私の後鞍にお乗りなさい。』

と云ひますと、美女は喜んで後鞍に乗りました。

二人は馬に乗り美女の指す方に行きますと、凡そ五六里來たと思ふ所に一軒の家がありました。

この時美女は少々お待ち下さいと云つて馬から下りたので、王子は門口に待つてゐますと、美女は内の人と何か話をしてゐます。その話を聞くともなしに聞きますと次のやうな事を云つてゐます、

『皆よ欣べ、妾は汝等のために美しい肥太つた男

を連れて歸つた。近來珍らしいお土産を持つて歸りましたよ。』

と云ひますと、子供の聲らしいのが

『先刻から空腹になつてゐましたが、母上がよいお土産を下さると思つて待つてゐました。その男を早く連れて来て下さい。早く喰べたい〜』と云つてゐます。

皆さんこの話を聞いてどう

お思ひですか。先きの美女は全くの處恐ろしい人喰ひ鬼の

やうな者であります。王子は之れを聞いて大に驚き、これは恐ろしや〜と思つて馬に鞭をあて一生懸命駆出すると、彼の美女は之を見て

『若しあ々、何所へふ行きなさいます。しばらくお待ち下さい。』と大声を上げて呼掛けました。王子は返歸つて壇

るものか、と後を見すに一目散に馳せ去りまして、さて五六

丁行きて後を顧向きますと、やれ嬉しや鬼女は家に歸つたと見え影も見えませんから、ほつと一息して四方を見渡しますと、

元來た道で見覚えがありますから、心も落ち付き宮殿指して歸りました。歸つて父の國王に今迄あつたことを詳しく語りますと、國王は王子の無事を喜び又大臣や家來の不注意を怒り、役人に命令して大臣を捕えて其罪をも聞かないで遂に殺



しました。

さて話は元に歸りまして、彼の大臣は王に向つて又云ふには

『我君よ、彼の醫師藤堂を今之内に殺し給はずば玉体は卵を累ねたよりもまた危険で山います。今私の詞を用ゐなざらないと後で悔んでも仕方のないことになります。』

と恐ろしい劍の様な舌で以て立板に水を流すやうに説きますと、元から氣の弱い王のことですから、遂に大臣の巧言に説惑されて

『汝の云ふ所誠に一理あり。それでは彼の醫師の命を絶つことにせう、そうして如何にして殺せばよいか。』

と云ひますと、大臣は心の裡に仕濟したりと思つたが顔色には出さず

『それは何なんでもないことで山います。彼の醫師を招き寄せて、汝は大犯人であるから斬罪に處すと申されて、役人に捕縛せば宜しう山ませう。』

と申します。それではと云ふので一人の家來に命じて醫師を招かしました。

こんなことは神ならぬ藤堂は知る筈もなく、國王のお召しであるから身支度整へて宮殿に参りますと、王は藤堂に向ひ

『今日汝を呼出したのは如何な用事だと思ふか、よく考へて見よ。』

と云ひました。藤堂は少しも何のことやら解りませんので

『私は何御用事か知れませんが、只陛下のお召によつて参上いたしましたばかりで山います。』

と答へますと、王は

『用事とは他のことではない、汝の生命を絶つて朕が害悪を除かうと思ふのである。』

と云ひますから、藤堂は餘りのことに呆れて言葉も出ませんでしたが、稍々暫くして王に申すにはこれは妙な仰せを承ります。私の生命を絶つて何の事がムいります、又私に何の咎があります。』

『云ふな藤堂、汝はこの宮殿に朕を殺す爲めに參つたのであらふ、この證據は十分あるぞ。』

と云へば藤堂は

『あゝ何んたることになつたのであらふ、昨日まで只管私は愛されてゐたに、今日となつて俄に

この残酷な言葉に逢ふとは露ほども存じませんでした。これは何者かの惡口をお信じなされたので、云ひませふ、私がそんな恐ろしい心を以つてますなら、初から難病をお救けはいたしません。

陛下よ、よくお心を静めて御かんがへなをし下さ』。

と申しますと、王は

『悪人は言葉を巧みにするものであるが、汝も亦その通りだわい、今更如何に申しても甲斐ないことを誰か藤堂を打て。』

と命じますと、役人は命に應じて藤堂を笞杖で撃据えました、打たれた醫師の皮は破れ肉は露はれて、河と流れる鮮血は衣服を浸し、見るも哀れな有様であります、醫師は尙ほも苦しき聲振り立て、

『陛下よ、若し人間のお心あらば私の命をお救ひ下さい、上帝は陛下を恵み下されませう。若し私を殺さば陛下は上帝の罰を受けます。』

と申しますと、王は

「朕は決して汝を救くることは出來ない、若し汝を救けば朕が生命は救からないのである。」

このときは役人は藤堂の左右の目を布で蔽ひ、繩で手を縛つて断頸臺に上せ、氷のやうな白刃を振り上げて、陛下の聲と共に一擊の下に首を切り

ふとさうと致しました。藤堂は忽ち聲を發して

『私が今死ぬるに當つて一言申し残したいことがります。陛下ふ聞き下さい。』

と申しました。王は役人に振上げた白刃を下させ

て
『今になつて申し残すことは何んであるか、早く言へ。』

藤堂は聲静かに次のやうなことを云ひました。

考へもの

(一) 一寸よりか小さな人間で日本中をあるきまわるものは、なに？

(二) まいにち讀るもので、上からよんでも下からよんでも同じものはなに？

(三) 人間のからだのうちで、上にも下にも、ほの字のつく五字からできた名の所は、どこ？

ほんのくぼ

婦人と子ども

子どもの特性につきて (つやき)

尾 田 信 忠



(三) 親の職業と児童の性質

親の職業は児童の性質に關係なしとせざるなり。このことにつき、余が嘗て某小學校高等科一年級及び二年級生徒、並に某尋常中學校一年級及び三年級生徒につきて、調査せし成績を左に掲げん。

(甲) 先づ各級中其性質殊に善しと云はれ居る児童の親の職業、並に、其性質殊に惡しと言はれ居る児童の親の職業を擧げ、如何なる職業に從事し居る人の児童は、其性質善くなる傾あり如何なる職業を執れ

る人の兒童は、其性質悪しくなる傾あるかを示さん。

(一) 性質殊に善き兒童の親の職業。

高等小學一年級ニテハ	高等小學二年級ニテハ	中學一年級ニテハ	中學三年級ニテハ
銀行取締	一 陸軍軍人	一 洋服商	一 遞信省官吏
會社長	一 醫者	一 學校教授	一 學校教授
學校教授	二 學校教授	二 學校教授	二 學校教授
農	一 遞信省官吏	一 內務省官吏	一 注制局官吏

此表中ノ學校教授トハ尋常中學校以上ノ學校ノ教授ナリ

以上の表にて吾人の注目すべきは、殆んど各級に通じて、其性質殊に善しと言はれ居る兒童の親が、學校教授たるにありとす。其他以上の表に顯れたるだけにては、親がかかる職業に從事し居れば、其子の性質が概してかく善くなり易きものなりと云ふ斷定を下し得るもの別に之なしとす。

(二) 性質殊に惡しき兒童の親の職業。

以上の表にて吾人の注意すべきは、其性質殊に惡しと言はれ居る兒童は、海陸軍人、並に醫業に關係ある人の子に多きことは是なり。親の職業と兒童の性質との關係はすでに説けるが如し。その此の如きは果して何に因りて然るか。思ふにある一定の業務に從事し居る人の性質は、大體に於て類似せるものなるが故に此點より親の職業が異なるに従つて、子の性質に影響することの同じからざることは固より然るべきことなり。即ち軍人、學者、商人は各其團體に於て、略一定の性質を有すれども、軍人の性質と學者の性質とは同じからず、又軍人及び學者の性質と商人の性質とは同じからず。此に於てか、軍人、學者、商人の子は性質形成に關して親より同一の影響を受けざるは言ふまでもなきことなり。尙親の職業が異なるに従つて、親か子を教育する事情自ら同じきを得ず。例へば學者の如きは、多くは常に子と同一家に

高等小學一年級ニテハ 海軍々人	高等小學二年級ニテハ 海軍々人	尋常中學一年級ニテハ 海軍々人	尋常中學三年級ニテハ 海軍々人
博物學者	一 博物學者	一 米商	一 醫
鐵道局官吏	判事	鐵道局官吏	醫
技師	一 技師	一 商	二 陸軍々人
官	一一一 判事	一一一 技師	一一一 陸軍々人
内務省官吏	工事受賃	内務省官吏	醫科大學教授
	一 判事	一 工事受賃	一 醫科大學教授

あり、朝夕子と相接し、子の言行に注意し、之を教育するの便利を有すれども、軍人の如き、商人の如きは、必しも然る能はず。或は業務の都合により家にあること少く、或は職務上屢其住地を轉ずるの必要あり、或は業務の都合により家にあること少く、從つて此等の人々が子を教育するは學者が子を教育する時とは頗る事情を異にせるものあり。此點よりも親の職業が異なるに従つて、子の性質に影響するとの同じからざるは固より怪むに足らざるなり。

(乙) 親の職業が異なるに従つて、親が子を教育する事情の同じからざることは、吾人が前項に説ける所なり。之に關して吾人は如何なる業務を執れる人の家庭の規律は厳整にして、兒童を教育するに適せるか如何なる業務に從事せる人の家庭の規律は厳整ならずして、兒童を教育するに適せざるか。吾人の得たる成績だけにて、最も目立ったるものと舉ぐれば、學校教授の家庭は多く規律厳整にして、家庭の諸般の事情が兒童を教育するに適當なるを知れり。其他かる職務に從事せる人の家庭は、特にその規律厳整なりと云ふ著明の事を見出さず。又家庭の規律厳整ならずして、兒童を教育するに適當ならざるは、すでに擧げたる海陸軍々人、醫者等の外に、辯護士、會社員、米商、工事受負者等あるを知れり。而して判事の家庭は、往々規律厳整ならざるが如き事實を見出したるは、吾人の甚だ案外に思ふ所なり。

抑も家庭の規律の厳整なりと否とは、兒童の性質に關係すること少なからざるは言ふまでもなきことなり

り。吾人の調査によれば、家庭の規律善からずして、其児童の行状善きものは殆んどこれなく、家庭の規律厳整にして児童の行状善からざるものは全くこれなし。但し後者に属する児童は、其性質何れも特に善きものゝみなりと云ふ事實は吾人の未だ知らざる所なり。

吾人はすでに児童を教育するは、親の大切なる義務の一なれば、親が自ら其子を教育し得る場合には、自ら其任務を果すべく若し親が自ら其子を教育し得ざる場合にあらば、相當の人を探んで、其子の教育を托し其性質を定成せんことを計るべきことを述べたり。而して如何なる業務の人は、其子の教育を他人に托する方其子の爲に宜しきかは、こゝに至り略讀者の理解せしことを吾人は信するなり。

胸に勳章を赫かし、意氣揚々馬に鞭うちて、市中を練り行く軍人も、家に巨萬の富を積み、目の望むに任せ求むる所得ざるものなき商人も、將來其財産を譲り、其家を繼かしむるは、自己の児童なるを思はず、豈能く之を教育せずして可ならんや。抑も亦學校教授の家庭は、児童を教育するに適し、其児童の性質は自ら善くなり易きものとすれば、學校教授の俸祿は少なきも、其待遇は高からざるも、學校教授たるもの亦別に自ら慰むる所なくんはあらざるなり。

(丙)ある一定の職業に從事し居る人の児童は、其性質大抵善くなり易く他のある一定の職業に從事し居る人の児童は大抵其性質悪くなり易きものなることは、吾人かすてに説ける處なり、而して其性質善しとか惡しとか云ふは、其語意頗る曖昧なるを免れず。此故に吾人はこゝに先に擧げたる學校教授の児童

の性質善しと云ふは、如何なる意味に善きなるか、軍人商人の兒童の性質惡しと云ふは、如何なる意味に惡きなるかを明かにせんかために、此等特別の職業を執れる人の兒童の特性を左に表示せん。

(イ) 兒童の性質殊に善き方。 學校教授の兒童の性質

高等小學一年級生徒 某 着實 無邪氣
高等小學二年級生徒 某 理ニ從ツテ事ヲ處ス 何群ニツキテモ徹底セサレハ止マス 舉止規律アリ
同 某 人チ憐ム 實着ニシテ感シ易シ 情強シ 同事ニツキテモ徹底セサレハ止マス 舉止

尋常中學一年級生徒 某 溫順 端正 人チ指揮スルヲ好ム

(ロ) 兒童の性質殊に惡しき方。

(一) 醫者の兒童の性質

高等小學二年級生徒 某 惡り易ク笑ヒ易ク 頑固輕躁 不平ナラス 然シ氣概アリ
同 某 輕躁 忍耐力ニ乏シ 何事モ心ニカケス 虚言ヲ吐ク
尋常中學三年級生徒 某 神經質 輕躁 稍傲慢 不平ナラス 人ニ狎ル

(二) 軍人の児童の性質。

高等小學一年級生徒

大膽 不潔 ナ意トセス

常常中學一年級生徒

輕躁 命令ヲ奉セス 教場ニテ手徒ヲ爲スコト多シ

同 同

傲慢 横着
稍狡猾

同 同

一事ニ長ク注意スルコト能ハス

(三) 米商の兒童の性質

高等小學二年級生徒

某 校規ヲ重ンセス 己ノ言張リシコトヲ通サントス 貢ケテモ言草ヲ言フ

同

不平ヲナラス 嘘睡ヲ好ム 運動會ヲ好ム

同

己ノ言張シコトヲ通サントス 我儘ナリ 人ノ風ニ移リ易シ 多少義侠ノ

氣アリ 無賴着ナリ 舉止規律ナシ

(四) 工事請負者の性質

尋常

三年級生徒

某 極端 舉止粗野 横着 不平ヲナラス 嘘睡ヲ好ム

(五) 雜貨商の児童の性質。

尋常中學一年級生徒

某

森惡 表裏一致セス 不平ヲナラス

生意氣

三十

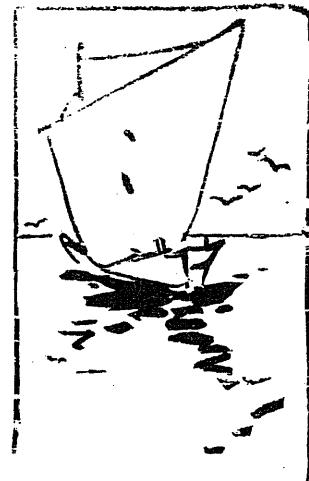
以上にて擧げたる所より、學者の兒童の性質は如何なる様に善きか、又同しく其性質善からずと云ふ中にも、軍人の兒童の性質と、商人及び醫者の兒童の性質とは如何に異なるかを知り得へし。此に於てか親の職業と兒童の性質との關係も、彌明らかになれりと云ふへし。而して親の職業が異なるに従つて、兒童の性質に影響する所此の如く異なることは、教育者の大に注意すべきことなり。殊に吾人は次の二點より、教育者は常に此事實に注意を怠るへからざることを信するものなり。(一)兒童の性質を善き方に導かんと欲せば、能く兒童現在の特性を知り、之に應して適當なる矯正法を講せざるゝを以て、即ち親かある特別の職業に從事し居れば、其兒童は之より如何なる影響を受け、如何なる特性を得るものなるかを知り、其特性にして惡しき所あらば、之に應して救治の策を講せざるへからず。然らばれは教育者か其兒童の性質を善くせんと欲して、多方苦心するも、勞多くして効之に伴はざることあるへし。

(二)兒童の性質を圓滿多面に發達せんことを計るは固より教育者の務むへきことなれども兒童それ自身はそれ／＼特別の境遇にあるか故に、學校の教育者か同一の方法を以て之を教育するも、各兒童の性質は何れも圓滿多面に發達すへきにはあらざるなり。此故に教育者は又一方よりは兒童の特性に應して兒童を教育し特別なる境遇の中に形作られたる特性を損せずして、益々之を善く發達せしめざるへからず。

すてに前項に舉けたる表によるも、軍人の兒童の如き、米商の兒童の如き、其性質固より善しと云はれ
 るも、必らずしも絶對的に惡しきにもあらざるなり。即ち大膽と云ひ、傲慢と云ひ、己の言張りしこ
 とを通さんと云ふか如きは、ある場合には頗る必要なる條件にして、世にはかかる人を要することも少
 なからざるなり、此故に教育者は多くの特性を心に容れ、一方にては圓滿多面に兒童性質を發達せんこ
 とを計らざるへからず。かの偏狹にして自己の性質と同しきものならては、之を容るゝ能はざるもの、
 如きは、豈眞に兒童の教育を托すへきものならむや。(つゝく)

子供等が銳敏なる嗅覺を有するは恰も犬の
 如く何事もも發見して狩り出す。他の事共
 よりも殊に悪事を

ケ　一　テ



實驗上の育兒法

醫學博士 濱川昌耆口述

未久利の弊害

▲砂交りの小便
未久利と新乳のおぬしに移る前に尙初生兒の小便の事を述べて置かう、普通の小便と思ふて居ると夫れが往々異つて居るので世の経験薄きものは是れが爲め非常に驚き隨分狼狽して醫師を招く事などがある、で其の異つた小便とは何ういふのであるかと云ふに、生兒は生れて十

二時間乃至二十四時間位小便の出ない事がある、爾うすると之れは小便詰りではあるまいかと大層心配になるものだ、けれども是れは驚く程の事ではない、何うかすると斯ういふ場合があるので一晝夜位経つと快よく放尿し始めます、夫れからも一つ注意して置くのは生れて後出る尿には細末な砂のやうな帶黃赤色として即ち赤く黃色味のあるのが裸裸へ附着て居る事かあるのです、是れには随分一驚を喫する事が多い、殊に斯ういふ尿の出る時には生兒が痛がつて泣くものです、夫れ故尙々喫驚するけれど是れとても驚く程の事は無い、斯ういふ結果を來すと云ふも生兒の腎臓内に或る變化があつて一種の尿酸鹽類を放尿するので全く生理的作用に依るもの故、之れが出盡して仕舞へば夫れで障りはない、併し一度や二度では止まらな

い、出たかと思ふと出なくなつたり、出ないと思ふと出たりして二三週間位は斯ういふ状態を呈する事がある、尤も餘り痛みが烈しいやうであつた又斯ういふ尿が頻々長い間出るやうなら醫師の診断を受けるが宜いが、左もなくば心配せずに出盡して仕舞う時を待つて少しも差支へない

▲末久利の害 次に末久利と新乳の事を述べやう、一体此の末久利と云ふのは支那から傳來した生兒の胎毒下しであつたもの、此の末久利は甘草と海草(鶴鳩菜)を調劑したものの、之れを煎じて生兒に飲ませるので、今日の醫學上から見れば、實に此の末久利は野蠻時代の遺物とより外思へません、去れども舊產婆などは往々之れを携帶し、產婦の家に老人でもあつて「生兒に末久利を飲ませないと胎毒が出來ますよ」と末久利を飲ませた

い氣色でもあると產婆はソツと煽動こんで「末久利を飲ませた生兒は御丈夫です」一杯と飛んでもない事を勧め込んで賣付ける算段をする是れは甚しき下剤ではないが、稍もすると此の中へ眞の下剤を用ひて通痢させるが斯ういふ末久利では生兒の健康を害します

▲新乳の通痢作用 末久利は傳來の弊害で斯んな薬を用ひずとも産後の乳汁は初乳と云つて後に至つて出る乳汁とは成分が違ひ通痢の効を有して居るものですが、即ち末久利を態々飲ませずとも自然に備つた母親の乳汁を飲ませれば却つて其の方が利目が多い、然るに初乳をば新乳だから毒だと搾つて捨てさせるのは自然の保育に背くの甚しきものですが、故に生兒には斯る有害無効の末久利を飲ませずに成丈け早く母親の乳を飲ませる事が肝要

である

三十四

健康なる生児の便

▲乳汁の機能 経験の無き初産婦が生児に乳汁を飲ませる時、乳首が小さかつたり、又縮回んで居たりする場合、夫から又次産婦の乳首が大き過ぎて生児が吸付けぬ時は、頻りに泣いて幾度乳首を付けて遣つても満足に吸付けない、爾うすると生児は益々火の付くやうに泣きたてる事のあるものだ、生れて間もなき生児に泣きたてられる程心の周章る事はないが、氣を鎮めて三四日位は色々と工夫して乳汁を吸へるやうに仕て遣るが宜い、スルと母親の方でも段々熟練するし、生児の方でも其内には吸付く工夫をするものだから、ソコで首尾よく飲ませる事の出来るやうになるのです凡て乳汁を吸はせれば吸はせる丈機能が盛に

なるから最初に乳汁の細いと思ふ人は充分に吸はせる工夫を講じなければならぬ
▲何故眼を覺すか 生児は生れて一晝夜位経つて母乳を與へる、此時故障もなく生児が乳汁を吸へれば、ソコで又快よくスヤ／＼眠るもので、先初生児は眠むのと、飲むのと、夫れから便をするのと此の三ツより外に役は無いもの、故に眠つて居る生児が眼を覺るのは腹が減て飢を覚えるか、左も無くば大小便の爲めに強褓を汚して不快を感じるか、又冬季ならば身体が冷えて寒いのか此の三ツの爲めである、腹も飽満して居るし、寝せてある床も、強褓も規則正しくなつて居るにも係らず眠りに就かぬのは必ず身体に異状がある事と心得、取敢ず醫師の診斷を仰ぐが宜い
▲注意すべき大便 母乳を飲んで居ると其内には

初生兒の普通の便となるのです、依つて健康なる生兒の便の事をお咄し致して置かう、爾うして毎時其の便に深く注意をなし、平生と變つたか否かの場合は機敏に判断を下し手當を仕なければならぬソコで健康なる便は孰れの生兒でも一定して居て、殆ど無臭で且つ黃金色で、其の性状は玉子と同じを水中に放ちたる如く一寸見ると食べて見たい程に思ひ、不快なる感は更に起らぬものである、處で若し其の兒に胃腸の疾患があつたり、乳汁の消化が正しくなければ何うであらうかと云ふに、便是直ちに變化を來して綠色を呈し、今迄一様に柔かでフワフワして居たのが急にツブツブが出來、菜の葉を揉碎いて水に浮べたる如き状態になる、万一生兒が斯んな便に變じたら是れぞ消化機能の障害されし徵候と心得なければならぬ

▲大小便の回數 夫れから大便の度數は生れた當時一晝夜に一二回から六七回位あるもの、小便の量數は二十分か三十分に一回ある事もあれば、又一晝夜に十回から二十回迄位、乳汁を澤山飲めば飲む丈従つて量數も一層多くなるのです

母乳の飲ませ方

乳母の飲ませ方は初生兒に取つて最も大切な、最も六ヵ敷ことである、營養の正しく進むと進まぬも、ムクムク肥つて健全に發育するも又病身な兒にするも母乳の飲ませ方が大なる關係を持つ居るのです

▲授乳の分量 ソコで親達から斯ういふ御質問が度々あります「母乳を飲ませるのに一回何の位の分量を與へたのが適當であらうか」と成程此分量と云ふ事は尤も大切なことで、多過ても害になる

し、ト云つて少くとも害になる孰れにしても不適當ならば疾患の基となるのです然らば初生兒には何の位の分量を與へて宜きかと云ふに乳房の中にある乳汁が何の位吸はれるものか牛乳の如く一定の分量を計ることは出來ないが理屈から云へば生兒の体重を量て置いて母乳を與へ其の乳が胃に飽満した後又其の兒の体重を量れば稍精密に母乳の分量を計り得れど是れは只一遍の理論に止まり一々實行の出來るものではない

▲授乳の時間 夫れでは此の分量を定めるには飲ませる時間を以つて計つたら宜からうかと云ふに是れとても健康なる小兒と虛弱の小兒とによつて各飲む時間が違ひから一定したふ咄しほは出來ない、強壯な無病息才な生兒を御覽なさい母乳の飲み方が荒いではありませんか、夫れに引換へ虛弱

な病身な生兒であつたら緩くり飲んで其の緩慢なことは健康な生兒と全然比較にはなりません、次には母親の乳汁が充分に出るか又不充分であるか、是れも飲ませる時間と關係ある故、一定したふ咄しほは出來ないので、私の實驗上に據ると母親の乳汁も充分に出るし、生兒も強壯であつたら五六分間で一回の量は飲み終るので、左もない場合には十分間も二十分間も飲んで居るか、先づ種々な事情や多くの場合を平均して一回の乳量を時間で定たら十分間から十二三分間と見做して宜からう

▲時間では不便 去れど此方法とても授乳中一々時計を見なければならず万一傍に時計を置いてもなければ飲過させるか、乳不足にさせなければならない、之れでは實に面倒で不便な方法である

から、夫れよりも一層簡便な方法で適當なる分量を定めなければなるまい。

▲分量を過す總て強壯な生兒は胃袋が飽満すれば一旦乳汁を飲むことを止めて仕舞ひます。乳汁を飲み止んだら直ぐに乳房を放しなさい。爾うして再び乳汁を吸はせないやうになさい。處が虚弱な生兒では逆も斯ういふ例は標準に出来ず、飲んでは乳房を放し、間を置いて又乳房に繋る、故に分量も瞭ららず、終には母親の情として分量が少くはないかと願ひツイ〜餘計に飲ませて仕舞うやうな事が出來する、授乳の分量に就いての研究は尙ほ次回に説明致さう。

▲吐く兒は肥る初生兒が乳汁を飲過ぎた場合に身体を動搖すると直に吐いて仕舞ふ、處が俗間では斯い人事を云『乳汁を吐く兒は肥る』と、一

寸考へると乳汁を吐いて何うして生兒が肥るだらうか不思議に思へるが、此の意味は即ち母の乳汁が不足でないと云ふ證據で、乳汁が不足なら吐きたいにも吐く丈の量がないからです、併し斯く乳汁を飲過ぎて吐けばこそ胃袋の働きを調節するが若し吐かなかつたら胃弱症となり腸まで弱らして仕舞うやうになる。

▲授乳分量の標準 乳汁を飲みすぎて生兒が消化不良を起すと、何により先きへ大便の變徵を起すのです、能く注意して御覧なさい、斯ういふ際には屹度大便が綠色になると、又平生よりは便の回数が多くなります、ソコで乳汁の分量は時間で量るとしても一般の生兒に適用する標準とはならぬから母親は斯ういふことを深く留意するのが肝腎です、即はち乳汁を飲ませて吐く事もなく、又

た大便も通常な正しい便で、身体の目方も次第に増えて肥満するやうなら之れが其の生兒に丁度適當した乳汁の飲ませ方であると御記憶なさい、デ此の標準を定めるのは熟練を要さなければなるまいと云ふお考への方もあらうが若し少しでも乳汁を吐いたり、便が平生と變つたなら直に乳汁の分量を控目にして御覽なさい、其の効驗は立どころに現はれ、乳汁も吐かず、便も健康の當時に復すものです

▲授乳の回數 生兒一回の乳量は之れでお解りになつたでしやう、然らば一晝夜の授乳の回數は何の位が適當して居らうかと云ふに先づ生兒が生れて一ヶ月間位は二時間乃至三時間に一回與へる事になさい、詰り一晝夜に十回内外と思つて居たら大なる誤りはない、夫から生後一ヶ月以後は毎三

時間に一回授乳し、夜は成可く飲ませぬやうにするのが生兒の健康上利益のある事です、爾して一晝夜を通じて六回から七回授乳する事と心得て宜からうケレど茲に特に御注意迄申して置く事がある、夫は素人の方は授乳の時間を餘り確く守り過て生兒がスヤ～眠つて居ても授乳の時間になつたからと無理に起して乳汁を飲ませる方があります、之れは飛んでもない心得違ひで假令授乳の時間になつても快よく眠つて居たら起して乳汁を飲ませるには及ばない、腹が減つて飢を覺えれば眼を覺して乳汁をせがむから其の時與へたので決して差支はないのです

▲老嫗の失策多し 授乳の回數は斯く定めても之れはナカ／＼實行の仕悪いものでツイ知らず識らずの間に餘計の回數を飲ませるやうになる、殊に

老母のある家庭では多く失策の有勝ちなれど其の児の健全を祈る母親は必ず授乳の規則を確守する事をお勧めするのであります。(つづく)

貞一の日記

(承前) 明治廿六年五月廿日生男兒

そ の 母

明治三十八年六月廿一日 今日は泣かず、母様

いつていらつしやいと、玄關まで送り出づ、

六月廿二日 シンブン、キク、バラハナ、などいひならふ、ヒン／＼ドウ／＼を節も詞も明らかに唱ふ、

今日皆々知らぬ間に、鼠入らずの戸を明けて砂糖をつかみ出してはなめ居たりき、
六月廿三日 下ふみ子さん、ピヤノを練習に來たり、ウエッヂングマーチを彈きしに、此方にて

耳を澄まして聽き居り、やがて父様／＼といふ、これは余程前に、父様が毎日彈き居りしを覺へ居りしものならんか、又安田さんが「めぐみの光」の讃美歌を彈けば、カーチヤン、エン／＼、コン／＼、ティチヤン、ヤン／＼、といふこれは此の前の日曜に、教會に行き、母がオルガンにて、此の歌を彈きしに、貞一がいやがりて、ヤン／＼泣きしを思ひ出したるなり、

六月廿四日 朝外へ出て遊び居りしに、ジャイ／＼といつて、胸の邊を引搔く、安田さん直ちに抱きて家に歸れば下痢す。元氣は左程あしからぬも顔色悪し、電話にて小原先生に報知す、代診佐々木先生來診せらる、飯を粥に代へて少くし、牛乳の方は減ぜずとも宜しと仰せらる。此頃は自分の方より好みの歌を注文す、ニーボ

ン(軍ごつ)ワーン／＼ボチ(花咲爺)グー／＼(兔と兎)
なと交々歌へといふ、

六月廿五日 昨日(きのふ)の夕(ゆふ)、夕映(ゆよえ)の雲(くも)を見て、母(はは)がか

ば色(いろ)になつたといふと、覚え居りしか、今日
も夕方(ゆよかた)、西(にし)の空(そら)を見(み)上げて、かばかばといふ、
父(ちち)貞一(さだかずかず)を呼(よ)べば、自分(じぶん)の方(ほう)でコタマテ／＼とい
ふ、前にコラ／＼マテといひしを思(おも)ひ出したる
ならん。

大きい獨樂(どくらく)を、オヤコマといふ。

六月廿六日 此頃(このきう)は、パンの肩(ひじ)らしきもの、落ち
て居れば、何所(どこ)でもかまわず、拾(ひろ)つて口(くち)に入れ
る、或時はコーグスのかけさへ口(くち)に入れし事(こと)
り。

六月廿七日 安田(やすだ)さん、春(はる)の進行曲(しんこうぎょく)といふを彈(ひ
くことあり、如何(いか)なればか、大嫌(だいきらい)にて自分が傍(そば)

居(ゐ)らぬ時(とき)彈(ひ)いても、遠(とほ)くから態(たい)を駆(の)けて來(くわ)てや
めさせ、他の曲(きょく)を彈(ひ)きだせば、安心(あんしん)して其所(そこ)を
去(さ)る、

ピーマーチといふを大好き(だいすき)にて、自身(じしん)に、ヒバ
チ／＼と名つけて、これをきくとよく睡(ねむ)る、晝(ひる)
寝(ねむ)の時は、安田(やすだ)さんの、ピヤノ彈(ひ)く傍(そば)に、自分(じぶん)
もこしかけ、しばらくの内(うち)に、こくと／＼とい
ねむりを始め、終(すゑ)には安田(やすだ)さんに、抱(いだ)かれてね
むるを例(たと)えとす。

六月廿九日 安田(やすだ)さんと、小原先生(こはらせんせい)の許(とねり)へ行き(たま)
重(おも)を計(はかる)つて頂(いたさ)く一〇、一一〇、瓦(かわ)なり

今朝(こちょう)安田(やすだ)さん、ピヤノにて六段(だん)を彈(ひ)
なりて、隣家(となりや)の玉枝(たまえ)さん、琴(こと)にて六段(だん)を彈(ひ)
け、ヤーさんコン／＼(ピヤノにて彈(ひ)きしといふ意)
といふ、夕方(ゆよかた)またピヤノにて彈(ひ)けば、またコト

といふ。

六月三十日 夕刻母に負はれて、渡部の大伯母さん之所に行く途中、湯屋の前にて、オユ〜〜といふ。今日は六段の節を全く覚えしと見え、口にて其節を歌へば直ちにコト〜〜といふ。

七月一日 繪本のモンキーを覚えたり

一太郎は如何にして教育すべきか」といふ本安田さんの机の上にあり、何時覚えしかタロー本といふ。

七月二日 失敬といへば、變な手付して、兩手を頭の方へ上ぐ、

父母と植物園に行く、喜んで園内を、馳せまわる、人力車を見れば、ガ〜〜のつてといふ。ガラ

七月三日 書寝よりさめて、サ、キセンセイ〜〜と呼ぶ、佐々木慶三先生は貞一の大好の人と見ゆ、洋服を着た人の通るのを見ても、時々サ、キセンセイといふ。

繪本の、山羊を ドーコ〜〜といふ、ゴートといふ積り。

七月四日 安田さんに連れられ、井上圓了氏の幼稚園に行く、今日は体格検査にて、主任の林氏多忙にて、何か其の方の用事の爲め教場を外づすにつき、一寸の間、安田氏に托して行かる、貞一は、他の園児と同しく小さき椅子に腰かけて、積木にて、汽車など獨りこしらへ居りしが、終には、席を立ちて、他の児の、積木を取りに行く、外に出つる時も、児等を連れ立つて出づ、花をつみなどして、女兒二人に手を引かれて遊

ぶ、唱歌の時安田さん、幼兒に歌はせ居ればモ
ツト／＼といひて、自分の知れる曲を、注文す
終にはコト／＼といひて、六段をのぞむ、
日一チエンといふ語を覚える。

七月五日 王が代を「きみがよは」まで音だけ正し
く唱ふ、語はまだ出来ず、チヨ、ヤチなど所々
され／＼に歌ふ。(つゝく)

松茸料理の一節

石井泰次郎

煮松茸の拵方

〔原料〕松茸四十匁、メリケン粉十匁餘
胡椒五分餘、メリケン粉十匁、湯一合、

松茸を鹽水にて洗ひ、莖の皮を剥き、笠の皮を剥
り、牛酪をとかしたる鍋に入れて、三分間いりて
鹽胡椒をふり入れ、熱湯を加へて、五分間以上煮

に入れ、粉をつけて、鍋に牛酪を入れ熱くとかし
たるに、入れて、葱を輪切にして、水より煎じ出
したる煮汁を、二勺加へ、鹽を五分、胡椒の粉を
五分加へて、五分間ばかり煎つけ、次に三葉芹を
水にて洗ひ、五分づゝに切りたるを、十匁ほど入
れ、湯を加へて、三分間いりつけて、皿にあぐる
なり。

煮松茸の拵方

〔原料〕松茸四十匁、メリケン粉十匁餘
胡椒五分餘、メリケン粉十匁、湯一合、

松茸を鹽水にて洗ひ、莖の皮を剥き、笠の皮を剥
き(略しては剥すにも拵へる)細く切りて、粉の中

るなり

蠣入まつだけの拵方

(原料) 松茸中笠十、蠣十箇、鹽二夕五分、胡椒

二夕五分、牛酪六十夕、牛生油、メリケン粉、

同量) 堅魚煎汁、醬油懸け

松茸中ノ大笠ばかりを、鹽水にて洗ひ、牛酪を敷た

る鍋に入れ(笠を上向にして)一つ宛に、蠣の肉の

大なるを一つ入れ、鹽胡椒粉を二分三分ほどづゝ

かけ、牛酪の小さき固りとしたるを、箸の先にて

所々にのせ、火強き、暖爐に入れて、やくべし、

時々取出して、汁を小匙にてすくひて、松茸の中

へつぎこみて焼くべし、さて蠣の能くやけて、卷

上る時、取出して、皿に盛り別け、別に搗置きた

る、かけ汁をかけて出すなり

○かけ汁の搗方、牛のケンチンの油をとかしたる

に、同量のメリケン粉を加へて、木杓子にてませ、

粉を加へたる加減は、木杓子にて交る時、鍋の底

をかきて、木杓子のめぐる時、其そこの見えたる
跡の、直にふさがる程の加減をよしとす、水の泡
の上面にたつ間は、出来ぬなれば、其上泡のた、
なくなるほど煉りて、少しこげる程に煉りたるに、
かつを煎汁と醬油少しを加へて、ところへに煉て、
蠣にかけて用ふるなり、香はしき味のかけ汁なり

交際につきて

吾

妻

▲交際に巧なる人は、これに由りて己を益し人を
愉快ならしむ、巧ならぬ人は己も數知れぬ不利益
を被るのみならず、人にも限りなく不愉快を與ふ。
交際の法を心得ぬ爲めに人の感情を害ふに至りて
は、其人は禮儀の心得なき人ともいはるべく、從
つては日常の道徳にも缺くる人なりともいはい言

はるべし。

▲お世辭は交際の上にはなくて叶はぬものなり。もし交際社會よりお世辭を取り去りたらんには、如何ばかり無趣味に殺風景なるべきよ、お世辭は偽にはあらず、他人に快感を與ふべき圓満なる我が心の顯はし方なり、言葉の上より。容貌の上より。さては態度の上より。

▲お世辭は誠實を拒非するものにあらず、交際の第一の要素は誠實にあること勿論なり。たゞ絶對

の誠實のみにては交際は成立せざるべし。虚偽は交際上、或度までは必要あり。贈物としては過ぎたる品とは思ひながらも、この品粗末ながらといふは、交際上必要なる虛偽にあらずや、蔭では等と立てながら、來客の辭し歸らんといふを、一應は引き留むるも、交際上の作法ならずや。天真爛

慢など稱して、思ふこと感じたること其儘を人前にさらけ出さんには其人や狂者に近かるべし。

▲心に在る不平を人に移すは避くべきことなり。この種の人を稱して機嫌界ある人といふ。

▲無口なる人に對しては、なるべく己より話しかける様にしてし。自分の言ふこと許り饒舌りて、人の話を一向心に掛けで聞かぬ人もあり、かゝる人に對しては何處までも聞き役の心得にて接待すべきなり

▲如何なる人に對しても、えらぶることは禁物なり。えらぶる程其人の心の底の見え透くに、身を下すほど床しさのまますは、是非もなきことなり。

▲外貌は心の鏡なり、外冷淡にして心の温なる人は少なし。冷淡は友を得る所以の道にあらず。「あ見えて心はまつたくよい人」もあることはあ

れども、あゝ見ゆるからには、何れ心にあゝいふ所のある證據と知るべし。

婦人と親族法(つうしき)

太田英隆

第二節 婚姻の要件

第一款 實質的條件

第一の要件、當事者の意思表示あることを要します。

。

この要件は、法律には明文がありませんが、婚姻の無効及取消を規定しますときに、間接に當事

者の意思表示が必要であることを定めてあるのを推考して知ることが出来ます。

第二の要件、男は満十七才女は満十五年にならねば婚姻することは出来ません。

男女身躰の發達は、人に依り又國に依つて異りますが、一般に論するときは、或年齢にならなければ十分に發達せないものであつて、一般の情況に従つて、法律上一定の年齢をきめその年齢に達せない時は婚姻するを許さないとするのは、規則を定める上に於て必要なことであります。

第三の要件、配偶者あるものは、重ねて婚姻を爲すことは出来ません。

重ねて婚姻を爲すことは、刑法でも禁じてありまして、一夫一婦の制度を公認したものであります。

第四の要件、女は前婚の解消又は取消の日から、六ヶ月を経過した後でなければ再婚を爲すことは出来ません。

男は前婚の解消せられ若くは取消されたときで

も、すぐ何處へでも再婚することは勝手であります
すが、女は懷胎したる儘前婚が解消せられ若くば
取消さるゝことが時々あります。こんなときはす
ぐ再婚せば、後の夫は前夫即ち他人の子を自分の
家で産ますやうなことになり、従つて血統を亂す

に至りますから、女は一定の規則を設けてあるの
です。こゝに解釋してをかねばならぬことは解消
と云ふことです。婚姻の解消と云ふのは、夫が死
亡したとか又は離婚に因つて婚姻の消滅したとき
のことと云ふのであります。

第五の要件、姦通に因つて離婚又は刑の宣告を受

けたものは、相姦者と婚姻することは出来ません。
姦通は、風俗を害することが最も大なるものであ
りまして、姦通したものの同志には婚姻することを
許さないのであります。若し許しますとするなら

ば、此の如き悖德者は姦通を以て離婚の方法と
し、却つて惡縁を結びたい爲めに公然姦通するや
うな弊に陥るのであります。
第六の要件、婚姻を爲すには左の親族關係を有せ
ないものに限ります。

(一) 直系血族又は三親等内の傍系血族の間には
婚姻を爲すことは出來せん。

これ等の親近者に婚姻を許さないのは茲に述
ぶるまでもなく、啻に倫理を亂すばかりではな
く、血統を悪くし人種の衰弱を致すやうな弊の
あるからであります。

(二) 直系姻族の間には婚姻を爲すことは出來ま
せん。

(三) 養子縁組から生する親族關係に付いては左
の場合に婚姻することは出來ません。

養子其配偶者、直系卑屬又は其配偶者と養親又は
其直系尊屬との間では、養親が其家を去るか又は
養子が離縁と爲りて親族關係が止んだときでも婚姻
することはありません。

第七の要件、婚姻を爲すには左の者の同意あるこ
とが必要です。

(一) 子が婚姻をするには其家に在る父母の同意
を得ることを要します。但男が満三十年女が
満二十五年に達したときは同意を得なくとも
勝手に出来ます。

(二) 父母共に死亡したとき、知れないとき、家
を去つたとき、又は精神病か何かで意思を表
示することの出来ない場合は、(一)の但書の年
に成らなくとも成年に達した子であれば、何
人の同意を得なくとも婚姻することが出来ま

す。併し、若し其子が未成年者であつたとき
は、其後見人及び親族會の同意を得ねばなり
ません。こゝに一つ問題となりますのは、父
母が子の婚姻を爲すことを拒んだときはどう
でせう。この時は勿論婚姻することは出來ま
せん。が、これが繼父母又は嫡母であつたと
きは、親族會の同意を得れば、親が拒んでも
婚姻は出來ます。

(三) 禁治產者が婚姻を爲すには、その後見人の
同意を得ることを要しません。

禁治產者と云ふのは、精神に大なる異状が
あるか何とかして、法律行為を獨りで出来な
いものであります。法律行為を爲すには後見
人が代理としてするのですが、婚姻は人に代
理をして貰つたのでは脚本にある喜劇のやう

なことになりますから、これだけは本人に任せたので、中々行届いた法規だと思います。

第二款 形式的條件

婚姻形式上唯一の要件は戸籍吏に届出づるにあります。我國從來い慣習に於てましては、一定の儀式を必要としましたが、新民法は決して儀式の成立を必要とはしません。

婚姻の届出は、當事者雙方及成年の證人二人以上から口頭か又は署名した書面を以て爲るのであります。届出の場所は、夫の本籍地又は所在地の戸籍吏にするので、入夫婚姻又は婿養子縁組のときは、妻の本籍地又は所在地にするのであります。その届書の記載方は戸籍法の規定に依るのであります。まして、別に示した通りにするのです。

婚姻の届出は、當該官吏の受理に因りて完全な

効力を生じます。もうして、この方式を要すると定めたのは、婚姻は之れに因りて夫婦財産上の關係親族關係等を生じ、他に對しては之を公示すべき必要があるのと、又一は當事者意思の確實を保障するの目的とに出でたのであります。

この婚姻の届出の書式は、何人でも必要であります。之れを知らない爲めに書記を頼んで、無駄な手數料を支拂はねばならないのが普通であります。この書式は別に法律で一定してゐると云ふ譯ではなく、只法律の示した條件を具備してればよいのです。田舎の村役場などに行くと、その役場的の書式を定めてゐて、それ以外の式では受けぬと云ふ風があるが、あれは大なる間違へで

ります。今御参考の爲めに、日本國中通用する書

式を左に示しますから、もし御入用の時は適用なさい。無駄な手数料を出すに及びません。序に一言しておきますが、親族法は、法理は容易でありますても、實際問題の起ることは法律上首位にをりますから、裁判所で民事中一番うるさいものであります。皆さんの中に、この法規の中でか解り兼ねる所などもありましたら、御遠慮なくお尋ね下さい。私は、幸ひ法律を知るにごく便宜な位置にありますから、研究してでも御答に應じます。併し辨護士のやうに鑑定料はとりませんよ。

婚姻届（普通の例）

東京府神田區仲穀町拾五番地民月主學生

明治三十八年八月拾五日

右父 太田英隆
右母 太田英隆

夫 太田英隆
太田英隆

妻 妻代

東京市日本橋區箱崎町二丁目拾參番地月主
松岡慶松平民學生

明治三十九年三月一日生

同意書を添へて出せば「右婚姻候問」の次に何々の同意を添へて書くがよろしい。
又墨書きの数字は筆致參照の六ヶしいのに限ります

右婚姻候問及届出候也

右母 松岡正雄
右父 松岡正雄

明治三十九年八月拾五日

太田英隆
太田英隆

松岡君代

東京府神田區錦町二丁目五番地官吏

證人 山本權助

慶應元年貳月九日生

東京府麹町區飯田町一丁目二番地軍人

證人 東郷彦六

明治元年貳月九日生

神田區戸籍吏桂五郎殿

注意

この外同意を要するもの、連署、又は其同意證書を添へねばなりません。併し、これがなくとも、戸籍吏は受理せねばなりません、ないときは只注意するまでです。

入夫婚姻加書の式は、右の「右婚姻候問及届出候也」と「右入夫婚姻候問及届出候也」と改めれば、他は全一であります。他にもありますか、これは略します。

(地位) 懸愛詩評釋

一部 愛知 伊藤 天郎君

(人位) 佛教文藝十二傑 一部 埼玉 鹽野まつ子君

埼玉 鹽野まつ子君

◎短歌

真宮起雲選

(地)

愛知 伊藤 天郎

飢に泣く兒をふところに霜の夜を貰ひ乳する我

痩せにけり

(人)

埼玉 鹽野まつ子

なまぐさか荒野のかぜの身にしみて屍をてらす

短歌募集

課題 隨意▲〆切 每月末日 ▲發表 本誌上

賞品 三座に粗景▲選評 真宮起雲

▲投稿 用紙隨意左記の處に送らるべし、但添

削返稿は往復葉書又は印紙封入の事

伊勢國白子局區内 みどり短歌會

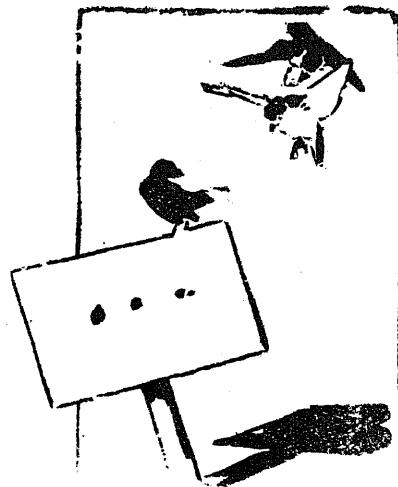
にはふなり

港川賊が男の子の名に榮えてながるゝ水にさく

あさ露の重きにたえで白萩のなびけるすがた繪
にしても見む

○ 平 岩 繁 治

評、一語物凄く覚え戰慄するの感あり



○當選發表

○

鹽野まつ子

りうたよむ

鞠はらふ荒野のすゑに月すみてころも手さむし

雁のひと聲

さらぬだに秋としいへば淋しきを小雨ふる夜の

寺すまる哉

たま／＼に訪づれ來つる伯母の寺奇しき香充て

り白菊の花

看經の伯母のすがたにそと泣きぬ泣きては時の
魔にぞ恐れぬ

○

飯塚 晓 譲

世を恨み人を妬むひはかな世とかこつ人の子う

ら若うして

山をこえ川を渡りて秋の旅はき咲くやどにかり
のこゑさく

はき寺のつきかけ清き鐘樓のわかき御僧のひと

○

る白菊の花

○

林 静 子

悶えもつ身はおばしまに朝夕を歌も緩らずかく

て老い行く

許しませ賜びしみ歌にむくゆべき笑み清からぬ
人妻の身よ

○

柴田 紫竹

あささめの夕べ悲曲を奏でます友のたか窓とも
しづほそき

しら菊にひとみこらせば我ながら神ならぬ身の
神と覺えつ

○

竹尾 玉枝

朝の氣のさむう身に浴む窓の外にきよきをほこ
る白菊の花

井上好古

曇りなき月に我身のいまさらをかこつ夜寒う雁

○

三井櫻

のこゑさく

○

高木紅玉

亡き母が小照出して泣く窓につめたくちりぬ山

茶花のはな

○

吉野絹子

菊そのにまばゆく灯入れまとるして妹のまひと

母の贊する

草枯れし野中にふはす地蔵尊ふもかげやせて亡

き父に似ぬ

○

白浪子

やはらかき白羽の鶴にふみつけて物言ひきかす

小春日の様

竹の扉はまだ閉されで白菊のまがをもるゝこと

の音はそき

吟せんに歌なくはてんわが思ひ氷るがごとし冬

の夜のつき

明けがたの夢のなごりを止めたるふもむきあり

な白菊の花

○

起雲

唱ふれど和する人なき淋しみを獨異がるわれや

せにけり

めぐまれし真綿を肌に暖かう歌ふもひするとも

し火の前(さる人に)

フレーベル會俳句端書集

一、課題 當季雜吟一人十句以下

一、締切 每月二十五日限り

一、披露 翌々月本誌上

一、賞品　三光には景品を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌購讀者は何人にとっても投吟する事を

得用紙は絵葉書に限り（眞筆刷物隨意）住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛にて送らるべし

埼玉縣入間郡芳野村

鹽野奇零宛

第十六回 併句端書集

行き暮る、白衣の人や芒原 仙台一風

冬の月按摩の宿のいと涼えて
道端に一と枝ほしき熟柿かな
朝寒や寝巻一とつで體手
露暗れて眺め氣高し不二の山
青燃し田面の里に雁の聲
月にて取残したり柿三つ
朝寒や八手の花は眞白にて
轍かげや芋の葉やせて臺珠沙華

蓮の實や飛で淋しき草の中
豆柿や百文づゝに束ねたる
朝寒や顔も洗はぬ舟の窓
鰐鮎や魚のはねたる水の上
雁風呂の肩丈け寒し松の風
夜や寒し膳酒に足らぬ思ひかな
ちまくと瓜の花咲く残暑かな

川 静 信 洲 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

坂木 甲斐 大坂 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

同 越 桐 同 梅 岡 同 同 同 同 同 同 同 同 同

同 村 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

天、朝寒や落ちる木の葉も昨日より
地、月の夜に五戸の碁や五戸の村
入、菊の香や天長節の物静か
朝立の峙三里や霧深き
勝菊の高さ譽れや世界一

三 光 追 加

埼玉 白醉樓
野 奇 零

虫聞くや夜毎憂き喪に籠りつゝ
板橋の落ちたまゝなり秋の川
薄暗き月の戸口や雁の聲
菊の香や菊の十句に酒の味

同窓會 小林雨峰

八月〇日〇時より町の小學校に同窓會が開かれ
ると云ふので、此日自分は姪に當るふみちゃんと
云ふ今年十五になる補習科の生徒を連れて、同窓
會の式場にと臨んだのであつた。

この小學校と云ふのは、元は尋常校の校舎であ
つたのを、尋常校の方が別に改築されたので、
高等科の學校に引直して、今歳の春から引移たの
である、二十年前に建築された建物であるから、
見るからに古びた造作、處々修繕を加へた言はゞ

縫ひ合せた綴ぢ合せた古着のやうな家屋併しこの古着のやうな建物ではあるが自分にはもう何とも云えない感じがした、二十年前自分が如めてこの学校に足踏みしたときは那んなであつたか、小っぽけな身體に取ては大きな建物であつたのが、今見ると小さくなつた様に見えたり、また其の時の先生は今はどうしたかしらん、小泊けな机を並べて居つたときの、八重ちゃんや、重ちゃんなんと云ふ友達の人はどうしてしまつたかしら、环と云ふ感じかしてくるとまた死んだ友達のとだの、二階の窓から墜落して怪我した人のとだの、自分が學校で麻疹を煩ふたときに、世話して呉れた人のとだのが、目に髪髪としてきたのである、此の時に當つては誰れでも、自分の年が老けたとには氣が付かずに、全く昔しに返つたや

うな氣がするのである、自分は父に早く死にわかれ十三の時から、他郷流寓の客となつて、まづ母校のやうすなぞには頗る氣がつかなかつたのであつたのが、今此に来て見ると、一草一本も何だか『よくきたのね』、と驕くやうに見え、戸障子の如きものまでか、歓迎してくれるのではないかと思はれて堪らなくなつた、

姪の、うちやんは、自分が沈み勝ちに爲つて考ひ込んで居るものだから焦慮がつて、『運動場の方に皆んなが集まつて居るから行きませうさあ』

と手を取るのである、自分も不圖思ひ付たやうに『種々と考へて居つたものだからね、さあいきませう、お友達も今日は澤山来て居るんでせう』『今年は屹度來る人が多いでせうよ、あら武田

さんも中川さんも皆んながきました、私は皆の
方へゆくよ、叔父は獨りで男生の方へいらしや
いな、歸りにはまた一緒に行きますから』

姪はすたと、運動場の方へ駆けて行つた、自
分はのそりと、教室を一々見て歩いた、標本
室には大分機械や参考品やらが并んで居る、すつ
と昔にいちくり返した機械はその儘である、向ふ
から二三の洋服やら袴の若い連中がやつて來た、
知つて居る人もあるが、知らない人もある、知つ
て居る人と知つて居らい人とを問はず、皆な是等
がこの母校から出た人だと思ふと、何れも懐かし
いのである、これからすと運動場にいつた、花

『君は高等學校の方を卒業なされたそうですな』
などと一人の地方中學生徒は語る、やがて一時の
ペルが鳴つた、

奇麗な花を手折つて持つて居る少女は神使の如く
盛裝して、彼處でも此處でも遊んだり話したり、
奇麗な花を手折つて持つて居る少女は神使の如く

デヤン〜〜、デヤン〜〜。

あ、このベルがとまた自分は昔日授業時間の報鐘として耳にき、馴れて居つた此音をきいたので何となく、また生徒にでもなつた氣がして、皆なの者と三階の式場へと詰め懸けた、

花瓶に挿れた麗はしき花にて飾られたる演壇の正面から左は來賓が五六十人右は地方委員、また左の方は女生席でそこに七十人許り、右にはまた男生席それに百二三十人それがみな、行儀よく列席して、それから幹事の報告だの議事だのと例の如く式を行つた、次に演説となつたが、來賓中の班白の老先生が登壇した、これはこの地方の私立中學を建て、居る名望家の一人として知られた人であつた、此の人の演説は時節柄有益な武士道と云ふやうなとであつた、話しが六かしいのであつたか、聽く者は早や飽きがきて式場も少しく騒しく

なつてきたが、廳てそれがお丁いになつた、次に自分の番であつた、がしかし、自分は感に堪えないので、他の人に順番を譲りた、それで一番年効あるこの學校の老先生尤も去年他校の校長に轉じたとか云ふ、先生が壇に上つたのである、年はもう五十に近いらしい、朴朴な扮装で、

『私は毎年この同窓會に臨みまして、珍らしい話もないのです、また年中同じとをして居る人ですから、改まつた感じなどもないのですが、只、無事で居りますと云ふとを端書で申上げます代りに、こゝに登つたのです……』

其の口調は滑らかではないが、重みある辯で、それから、この先生が明治十八年から、この土地の學校に来て教鞭を取つて居つたとから、教えた人は老ぼれていきますが諸君が成人してゆくのが唯

いの樂みであると、述べられたのには、自分も實に感激して、鄉先生なるもの、恩澤を忘るゝとが出来ないのである。鄉先生は一郷の大恩教主であることは決して忘れてはならぬとなのであること。自分は深く覺つたのである、やがて今度は自分が愈々演壇に登つて感謝の詞と感慨の意を陳べねばならぬ事となつた、漸く落付いて演壇に登つた、がしかし、自分は一郷に對して誇るべき何事をもして居らない、また郷里に取りては、どれ程にも認められて居らない、云はゞ一介の窮措大であるから、實に慚愧なのである、併し思ひ切つてこう云ふとを述べた、それが自分の信念から迷はしつたのである。

『人と云ふものは予か今母校に來つて母校を懷かしく思ふやうな心情を以て世の中に處すべき

である、それで自分には常に二つの故郷があると思ふて居る、肉身を棄けた父母の國と、生活を營むでゆく社會と云ふ故郷とであります、それが平生社會の家に出たときは、それを故郷と思はぬものであるから、種々な邪な心を起すやうになる、墮落して第一の故郷に面が合されなくなるのである、そうして、第一故郷にあるやうな温かな風はなくたゞ冷めたい社會の浮薄な潮流に捲き込まれて、第一の故郷にて訓化されたるなどは實際に行はず、また世人に對しても社會の成り行に任せの方がよい道徳的などは當節は流行ないと云ふやうになるのである、自分はかかる風潮に遇ふたとがあるが、そんなとが道理でつまり惡俗に染むのが眞理であるならば自分は第一の故郷にありて訓化されたとが悉か

り偽りであつたと断定せなければならぬ、そんなどは無い、第一の故郷で温かな訓化のもとに養はれたものは、其の心をもつて世の中に一生を通さなければならぬ、故に社會と云ふ故郷から常に第一の故郷をぶりかへつて見たとき冷めたい元と異つた心持をもつて居つてはならぬ、生れた故郷に對しても社會と云ふ故郷に對しても常に同一の心情でなければ、生れた故郷に老いても故郷の眞の味を知らず、また社會の故郷にありても淋しい生活をしなければならぬと思ふこれが私の處世論で……」

ればならぬと云ふとを滔々と辨したのであつた、然し自分は殆んど感覺が嵩して來たので遂に一貫して陳られなかつた様な氣がしたのであつた、夫から演説は拍手のうちに終り次に生徒の催しになつた、福引だの三分演説だのの餘興があつたり、辨當が出たり、隨分賑かな同窓會であつた、ところが此の同窓會のとを記して式場で配た最後の新聞（と云ふても眞筆版刷のものではあるが）に自分の演説につきて、

『某の演説に感激して幹事某は遂に卒倒するに至れり其熱烈の情は言外に溢る……』

とあつた、自分はたゞ人生問題に對して青春の壯年燃ゆるが如き情緒を有する人への注意にと思ふたと云ふ例を擧げて功名權勢の様を得んしてはならぬ、人の本務が何であるかを自覺して勵まなければならぬ、

而してかの少年なるものは煩悶堪えなかつたのであつたが遂にその煩悶から脱する事を得たとの事であつた、多少病的の傾向があつたのであつたとかであるが、

あゝ願くは自分は四十五腰に梓の弓を張り、白髮銀を頂くの時代がきてもの小學校の同窓會に臨んで、小供になりたいものである、無邪氣な

大人として生活したいものである、と書き終つてまた遂に自分ばかりオーペラースの詩中の人となるを禁じやがなかつた、

My heart leaps up when I behold

A rainbow in the sky;

So was it when my life began;
So be it when I shall grow old,

Or let me die!

The Child is father of the Man;

And I could wish my days to be

Bond each to each by natural piety.

煙を眺めて虹見れば

われの心は躍るなり

幼稚き時もかくありや

老ても斯ゞぞあらまほし

さむは生きて何かせん

實に幼兒は成人の父

造化を愛する心もて

世に在る日なば結はなん

(八月廿一日記)

桑港のわびずみわ

とし

子

變成男子には法華經の奇蹟、轉女成男とは彌陀の
誓願とされけど、これはまたいかなることぞ、翳む
れぐるしづる三十男、巾幘に覆面して、讀者にまみ
ゆることの苦々しやと、仰せらる、方もあるでござ
ぬふやせう。まあ御静かに遊ばせや。愚痴のやう

ですが、四千里外の述懐、そんなに嘲らずに御聞
き下さいませ。

太平洋の月に嘯きて、わが船のすみをたのしみ
しころは、吾も雄々しき男子にて、満腔の壯圖を
雪崖嵬たる浪にそぎたる夜半もございました。

はじめて新大陸に靴のあとをしるしましたとき、
あはれうき事よロツキーの山ほども來れ、ナイヤ
ガラの滝ほども吾を襲へかしと思ふたのであります
が、見るとしてきくとして、わが國ぶりと異なる
のですもの、この國ぶりに慣れし人の順境と見
ることも、吾には岩石嵯峨たる逆境と現はれ、雄
々しき心も挫けはて、恥かしやこの國に來りし
とを悔いし夜半もございました。

八年來弟とも妹とも思ひていつくしみし教へ子だ
ちのこと、朝だに夕べに忘れがたく、寫眞をなが

めでは夜のふくるを知らず、歎場の夢破れては孤
枕に涙を注ぎ、はては星のきらめきも胸をいたむ
る媒となり、雲の色も悲みを誘ふのよがとなる
のですもの、どうしても男性の資格はなくなつた
のでございませう。

故國にありてはおほけなくも人の子を教ゆる身の
この國にては火を焚くことさへ數へらるゝ情けな
き今の有様、要敏捷々々々と云はるゝごとにはじ
めて知るわが性の鈍ましさ、せめては名ばかりも
敏子とせんにと、かくは命じたのでござります。變
成女子の由來は先づこれだけとしてこの頃のわび
ずまひのスケッチ、拙き筆にて書いて見ませうか。
渡米後五十余年、慣れぬ勞働のため心臓に病を得、
しばらくバードウヲレクをさせて、家庭働きをして
居るのでござります。名利を紙屑のやうに蹴捨

てたる身も、故ありて、金ほしき鬼に身を現じ、四千里外にさすらひ來つたのであります。この弱きからだにては、鐵道ウヲークもむつかしく、農園勵も覺束ありませぬ。わらなくも慾火に水を注ぎて、閑散の生活をしてゐます。流石は米國、親切にも價格ありて、給料の少き家は、その割たけ親切に、給料の高くなり次第に、陥路の人を遇するやうになるのでござります。金門公園の片は

とり、かけ離れたる一軒家にて、夫婦二人だけの家庭、その下男いやさく下婢はとし子、生存競争の昨日の夢あとなく消えて、やゝ詩的なる今日このごろ、吾にはつらかりしアメリカの風、面を吹いて寒がらぬやうになりました。主人は腦病保養のため、空氣清朗のこの地に別荘を營みたるもの、よし、主婦はハイスクールの教師にて、且つ畫工

でござります。本宅はスタクトン街にありとか大邸主にて兼ねて受負事業をもやつて居るとき、またした。

何をか憂ふる、歌ひ玉へ歌ひ玉へ、君は歌を知らずとなれば吾先づうたはんかくと高々とうたひだす位な快活なる主人、君まだ理解せぬとな、よしこに英和字書あり、引き玉へそれわかつたでせうとて、會話に字書を與ふるほど氣長き主婦、レディと云ふ馬までが極めて穏和にて、吾はまことに樂しき家庭に來たのでございました。

吾室は三階の一間、畫室と隣り合ひの清素たるところ、床を離るゝは午前五時、こはしかし自分のさだめたる規則にて、實際の働は七時十五分前よりはじまるのでありますから、勉強のいやな朝なんか、枕の下に時計を置きて、幾度か夢の世界に

去來するともございます。

働きはじめはストーブに火をなきつけ、湯を沸かして珈琲の仕度をなし、卵を煮るやうしつらひて、かのレディに枯草を飼ひ麦を與へ、水をのませ馬屋を掃持してのち、門口の階段を洗ひ淨め、水管を開きて、庭園の花に灌ぐこと十分間、人工降雨をやるのでござります。一年三期全く雨を見ずと云ふこの加洲にては、いづれもこの方法をとつて居ります。名も色々の花の香、朝風にゆるきて、白妙のわがエプロンも匂ふばかり、公園の森には鳥の聲面白く、電車のみちも静かにて、辻々の殘燈暁星と青きを競ふて居るやうなるも、うるはしく、胞の痛みもうすらぐ心地いたします。やがてマダムも起きいで、料理しながらの話面白く、文學のこと、詩のこと、はては今日の新聞を種と

して日本の外交を評し東洋の形勢を論ずるなど、庖厨は中々賑かであります。

料理の色々、見るもはじめ味ふもはじめ、諾哉々々と答へながら、順序をとりながら、方法を誤りなどして、笑はるゝ恥かしさ、敏子なかなか敏子ではありませぬ。牛乳を用ふること醤油の如く、焼きものは必ずバターを要するなど、一種異様の感いたします。食堂に卓をしつらひ、露を帶びたる花は瑠璃の花瓶にうなだれ、銀色がいやく器物のいろいろ、その置き場所を覚えるにも、鈍子さんの骨折容易でありませんでした。

肉叉をとりてより四十分間、呼鈴のなるまでの間に、吾はコツクの器物を洗ひなどし、ケツチンの卓にもたれたるまゝ、その日の課業の下調をするのでござります。

食卓を撤してのち、書籍をかたよせてそのまゝの食事、故ありて肉食せぬために菓子やら菓物やらマダムの贈もの堆く、悠然としてブレードをしため牛乳をすゝる顔つき、吾れながらどんなことかと一寸と見てやりたひことがござります。孟子にある齋人(?)のことなど思ひいだし、ひとり失笑する時もござります。皿を洗ひストーブを磨き、ケツチンを掃持して朝の仕事は終りとなります。

(つづく)

養成の事業も進んで居らぬといふて嘆かれ、此養成所の設立は偶然のものではないといふことを述べられたが、私も至極同感を表する次第であります。且つ他の學校卒業式といへば中々賑かなものであるが、あまり賑かではないが、前途に希望の多い此の養成所の卒業式に私の列なりますのは更に一段の光榮と存ずるのである。

そこで、只今、多田君の御話に、日本にては、幼稚園は未だ十分發達せぬといはれたが、夫れは我國では十分に幼稚園の設立を奨励せぬといふことが一つの理由であると私は信する。幼稚園以外の學校は、今日、政府でも獎勵を加へ、或は強行を令するといふ次第である、現に義務教育の如きは其の一例である、尙其他の教育に就いても隨分奨勵を加へて居る、然るに幼稚園に至りては、未だ

保育者のため

東京保母養成 澤柳普通學務局長の演説

本日この席に參列することを得たのは、私の光榮とする處である、殊に、只今本所の多田君の御話に、我が國の幼稚園は未だ發達しない、随つて保母

獎勵法の見るべきものがない。數年前に文部省が規程を出して、小學校令施行規則中に附け加へてあるけれども、それとも、只取締に關することのみである、即ち幼稚園の設備は如何にする、人數を制限する、時間を規定するといふことで寧ろ、濫設を防ぐといふ消極的の方面に關する事項である。而して他の一は、幼稚園の職員には恩給の特典があるが、保母には未だ其の事がない、而して其他保母に關して別に何の十分に發達せぬ主なる理由であると思ふ。

思ふに何故に政府は他の各種教育事業に對して、獎勵を加ふるにも拘らず、獨り幼稚園に對して、かくせぬかといふに私の考ふる處によると、次の

二つの理由があると思ふ。その第一は眼前の教育事業におはれて幼稚園の如き其の功果の直ちに現れずして、遠く將來に望を囁かることには手がありや否やといふことを十分に講究されて居らぬことは、曾つて保母の恩給制度を布いては如何といふことにつき高等教育會議へ諮問に及んだことがあつた。處が、中々議論が湧き出で、トウヽヽ決着しなかつたのを見てもわかる、尤も外國にても英米は、小學校教育以前に幼稚園の教育を必要とするとは教育家の意見一致して居るが、幼稚園の本家本元たる獨乙にては二派に分れて今日未だ何れとも決定されて居らぬ、即ち一は幼稚園は教育上利があるから獎勵すべしといふ論と、他

は之に反對の意見とがある。此の如く、一方には我が邦の教育は眼前に横はり居る急施の問題を取片付けるに忙はしくして幼稚園のことと思を致すことを能はざる事情と、幼稚園の本家本元たる獨逸に於て、幼稚園其のものに對する議論のある處より今日十分に獎勵も加へず、隨つて發達を鈍からしるのであるまいか。私は推測するのである。然しながら、今日他の教育上の施設は概ね緒につき、このまゝ打ち捨てふくも着々進歩發達する事であるから、少しお考を他に向け、幼稚園教育に對しても定案を設け、果して、幼稚園其の物の利益を認め、ドウしても獎勵すべきものなりとのことを一定したならば、我日本は改良に對し何事に進んでやる、ムシロやり過ぎる位の傾向があるから、幼稚園の設立も、靡然として各處に起り、

普及發達が十分でないといふのを嘆息された多田君も亦却つて其の濫設を唱ふるに至るの時機到來することであらう。即ち如上の問題を解決するに當りては公にはこゝに御列席の中村、東其他諸講師を始めとし、私にはフレーベル會の如き大に此事に與かるの任務を有せらるると共に、本日御卒業の諸子も亦、直ちに幼稚園事業の實際に從事せらるのであるから、此の問題のよりよき解釋者である。希くは、各自其の任の重大なるを自覺します。奮勵して斯道の爲に御盡力あらんことを聊か祝辭にかへて一言すること此の如し。

同、岡東京府第一部長談

何か私にも一言せよとの、御注文であるが、豫め考へておらぬ事故、是ぞといふ意見もない、而し、

先刻來澤柳局長及多田氏の御説の如く我國の幼稚園は其の名のやうに幼稚であつて、進歩發達せぬと申すのは是れは事實で、聊か教育上物足らぬ感がある。それにつけても、今回こういふ養成所が出來て、今日諸子は御卒業の榮譽を得、是よりは出で、斯道の爲に盡さるゝ事となりますのは幼稚なる幼稚園の發達の上には實に偉大の功を奏する事、深く喜んで居ります、そこで、此の幼稚園のことは、この東京市では、あまり獎勵致しませぬ、どちらと申せば設立をおさへて居るといふてもよい、之れは何故かと申せば、未だ小學校教育に関する施設が十分でない、市内の學齡兒童を收容するに足るだけの學校もない程であるから進んで幼稚園の設置などを勧める譯には至らぬ、而しながら、現在存立する幼稚園に就いて見るに、

どうも保母が缺けて居る。保母はあつても適良なる保母のないといふことは至る處に聞くの言である。かかる際に、こういふ養成所の出来ましたのは私は實に心強く思つて居ります、そこで、昨年開戦以來、軍人の家庭遺族の便を計らんとして、我市内にも三四ヶ所の幼兒保育所が出来た。即ち保育所にて幼兒を預り、其の母親に作業の便を與へつゝありて、今後とても、此の事業の繼續さること、信があるのであるが、如何にせん、こゝに従事する保育者ともいふものに人を得ないので、このよい計畫も十分の成功を見ずに終るといふことがありはしまいかと氣遣ふのである。中には隨分老練にして而かも保育の理を究むる者もあるが、時としては無智なる老婆若くは婦女子の手に托さるゝといふ状もあるから、是等保育所にも、諸子

の盡力を仰ぎ、眞に設立の目的を貫徹したいと思ふのである。保母の任務といふのは獨り幼稚園にのみ從事する役目と思ふのはまことに範圍の狭きことであつて、幼兒の居る處は其數の多少を問はず、その範圍内なることを合點し、世の天真無邪氣なる兒女い手を導きて、將來の偉丈夫となすは諸子の双手に存することを確信し、斯道の爲その天職を盡されんことを希望す。

以上、去る九月東京府保母養成所卒業式に於ける演説の大要にして、雑誌「日本の小學教師」に掲載したるものなり。

の本郷、下谷、淺草、本所、深川五區の組合の報告あり、其主要なる件は現に採用せる唱歌遊戲の題目を擧げたるにて之に關して一二の質問あり、次に女子高等師範學校助教諭竹島茂郎君の自然物と教育に關する演説あり次に隨意談話に移り茶葉を供し庭園に於て遊戯などして午後四時半閉會す

入会

東京品川南島場海藏寺内

香川縣外綾歌郡府中村

長崎縣北松浦郡平戸村幼稚園

東京江北幼稚園

同上

台灣台南第一公學校

鶴町區上六番町一六

下谷區上車坂五三

麻布區篠町九四

福井縣敦賀郡野村筋生野栗野小學校

會費領收(自明治廿八年九月廿六日至同年十月廿六日)

金額	年	月	日	姓名
四〇	三八、	五	三八、	武石八重子
六〇	三八、	五	三八、	荒井つや子
八〇	三八、	三	三八、一〇	千浦はる子
五〇	三八、	四	三八、八	松田シイ子
四〇	三八、	五	三八、一〇	本多千代子

金額	年	月	日	姓名
四〇	三八、	五	三八、	武石八重子
六〇	三八、	五	三八、	荒井つや子
八〇	三八、	三	三八、一〇	千浦はる子
五〇	三八、	四	三八、八	松田シイ子
四〇	三八、	五	三八、一〇	本多千代子

金額	年	月	日	姓名
四〇	三八、	五	三八、	武石八重子
六〇	三八、	五	三八、	荒井つや子
八〇	三八、	三	三八、一〇	千浦はる子
五〇	三八、	四	三八、八	松田シイ子
四〇	三八、	五	三八、一〇	本多千代子

明治三十八年十月十四日日本橋區箔屋町城東小學校附屬幼稚園に於て開會來會者六十名、申村主幹の開會の辭、會員下田たづ子氏

第三十八常會

金額	年	月	日	姓名
四〇	三八、	五	三八、	武石八重子
六〇	三八、	五	三八、	荒井つや子
八〇	三八、	三	三八、一〇	千浦はる子
五〇	三八、	四	三八、八	松田シイ子
四〇	三八、	五	三八、一〇	本多千代子

金額	年	月	日	姓名
四〇	三八、	五	三八、	武石八重子
六〇	三八、	五	三八、	荒井つや子
八〇	三八、	三	三八、一〇	千浦はる子
五〇	三八、	四	三八、八	松田シイ子
四〇	三八、	五	三八、一〇	本多千代子

も ど 子 と 人 道

三七、二一一三八、六
三七、二一一三八、六
三八、七一一三八、九
三七、九一一三八、一
三七、四一一三八、九
三八、六一一三八、一
三八、一〇一一三八、二
三八、八一一三九、五
三八、九一一三九、二
三八、二一一三八、一
三八、一一一一三九、四
三八、八一一三八、一
三八、三一一三九、一
三八、四一一三九、一
三八、七一一三八、一
三八、一一一一三九、三
三八、一〇一一三九、二
三七、一一一一三八、一
三八、五一一三八、九
三八、一〇一一三八、一
六一一三八、三
三八、

竹林山常子とぶそのことこれなるト力アマタ久寿強子正をもみエシヨ子タキウタキナリ

上達野あいこま岩崎本山飯島波津米
小太服岩安伊小内稻岸後櫻北吉佐大
澤田部村藤野葉杉藤邊藤井野千代
くただゑた政義かかり福い光し
らめきつみみ良倫奴ね郷ん雄と華暗う

會務整理上差支候間會費未納の方
は至急御納付下され度候

女子高等師範學校入學試驗問題集

フレーベル會

發行所

高等女子學會

定價金四十錢

郵稅四錢

花の心

編輯主幹 佐々木信綱

第十一卷第十一(十一月一日發行)

契沖の家系

上田文學博士

三輪川

森鷗外

桂園一枝抄註

横井文學博士

陣中手束

井上通泰

香川景樹の自信力と其歌に於ける慣用的習解法

彌富濱雄

喜劇あねいもと

大塚楠緒子

松島遊二律

須磨野浦子

奉天より

吉野山

在獨

染井墓地

内山不鳴士

秋のふとづれ

湖畔

竹柏園歌話

佐々木信綱

女歌人歌集講義

山田ふさ子

△每號和歌課題競点あり△投書

千月

△定價一冊郵稅共拾參錢△半年

七拾五錢

を歡迎す

竹柏會出版部

△日本橋區本石町一ノ一

東京神田區小川町竹柏會

正價郵稅共金五拾貳錢

思ひ草は文科大學
講師佐々木信綱氏
か十數年來苦心の
作をあつめし歌集
にして清新の想と
雅馴の調と氏の特
色を發揮せる歌集
なり

歌ひ思集草

●ふ乞を記附御旨るた見を(供子と人婦)は節の文注御●

- ねんねしたね.....口 紘
- 天長節の子供の歌.....虹 童
- 子供の土産ものにつき.....三重雲川子
- 子供の質問に答へ方.....白 虹
- 疳瘡を直した青年の話.....桜 柳子
- 食物が消化する時間.....醫科大學白水生
- これぞ眞の家庭の音樂會.....
- 小兒に流行する飛び火病につきドクトル青木大勇
- みにい嫁をとつた主人の自白.....玄洋の父
- 第二回ふ伽噸懸賞募集.....賞金五圓
- 實用しみぬき法.....
- 自治心を養ふふ伽噸.....法科大學安城子
- 學校辨當の説明.....嘉悦 孝子
- 松茸の新料理.....

號六第
行發日一月一十

明治の家庭

毎月一回一日發行
一冊前金六錢
六冊郵稅共三十三錢
一ヶ年六十六錢

みよや
理屈は云はないで實用ばかり
やさしい文章でおもしろいかきかた
質問は遠慮なし返事は親切でわかるまで
子供の育て方には一心ふらん
保育の實際は眞にこの雑誌のみ

後付の二

社庭家の治明六町戸納區込牛市京東所行發
(局本話電)館文寶三町石本區橋本日市京東所賣發
石井泰次郎

一日 界 授 教 每月

(日一月一十號十第卷三第) (行發日一回一月每)

●錢參拾券郵本見 ●増割一手切錢一用代券郵●錢壹稅郵 ●錢參拾分月ヶ一●
●共稅郵上以●錢貳拾四分月ヶ三●錢拾八分月ヶ六●錢拾五圓壹分月ヶ貳拾● } 價定

研成會規則（摘要）

本會は其目的に據つて空理空論を避け實際的應用的奏功的を主義として立ち、教授界は即ち其の機關雜誌にして口繪には毎號各府縣の重要物產精圖の極彩色標本代用を續載し内容は實驗論說、教授及訓練、教案、實業科、學校及家庭、體育及音樂、實驗研究、文苑、學術、雜錄等の諸欄に分れ、教授訓練、教案、實驗研究等は殊に力を注ぎ會員は如何なる質問も出來如何なる投書も出來、本會開設の講習會には便利の入會法もあり、神聖の教育者を以て立ち國民を養成するの重任を負とせらるゝ諸君士は奮て御入會あらんことを希望の至りに

東京市六丁目地区富士番拾見町區町市行所研成會

八一 定 錢 部 價

明治の婦人の人

毎月一日發行

社人婦の治明地番一七町番二下區町麴京東所行發

者筆執
宮羽嘉水
仁悅谷
田も孝直
脩子君
君
津桑谷
川田上
家春紀
立風郎
君君
柏山岸
木山根
内八千
月靄正福
代次雄
君君君君

一、明治の婦人社同人は、其實用的才能に加ふるに、穩健なる美的修養を以てするもの、これ即ち現代が要求する婦人の資格なりと信す。
一、「明治の婦人」は、此の要求に應じて現代に處せむとする婦人の好伴侶たらむ事を期す。

明治の婦人社友規則

一、本社の趣旨を贊成する婦人をもつて社友とす。
二、社友には本社發行の明治の婦人を配付し且つその投稿を歓迎す。
三、本社は時宜により公開講演會もしくは社友懇話會をひらく。
四、社友は社費として一ヶ月金八錢の割をもつて、三ヶ月分以上を分納するものとす。

「明治の婦人」要目(十一月三日初號發行)

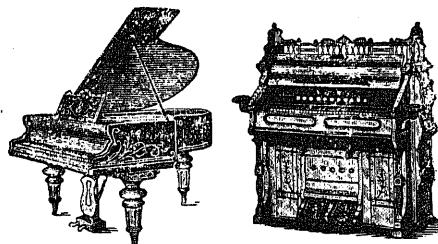
一、家庭 一家の主婦として必要な家事衛生、家事整理、育児の法、兒童の心理等を容易に丁寧に説明して且つ各種の料理法等を掲ぐ。
二、論說 教育及家庭、其他婦人に有益なる諸種の評論を掲げ、かれて時事の出来事を評論し徒に空理空論にはせず。
三、雜報 時々注意すべき社會の真相、古今の名ある婦人の傳、其他百般の事項を本編に收む特に趣味津々たるべ詞藻 美文、新体詩、短歌、俳句等を掲げ、小説は極めて純潔なるものを選ぶ。

(號一十第卷五第もど子と人婦)
(行發日五月一十年八十三治明)(行發日五
月一九年五月回一月每)

リセ領受ヲ牌賞等壹第於ニ會覽博國內回五第ハ琴風製葉山

A decorative horizontal separator consisting of five black asterisks arranged in a staggered pattern.

琴風製葉山
〔附險保〕



現下西洋音樂の騒々として隆盛に趨きつゝあると共に之れに伴ふて舞踏の發達又期して待つべし本書は女子高等師範學校其他の諸學校に於て實施せらるゝ舞踏の方法及び舞踏曲を記載したるものにして之を練習せんとする人の爲めに其順序步調等を詳解しあたれば如何なる素人と雖も一度本書を繙かば忽ち其方を曉り又舞曲の演奏をも練習しえ得へし今や第三版を重ねるに當り世の青年淑女諸君に廣告す希くば速に一本を備へて本書に依り舞踏の妙味を習得せられんことを

方

吉田信太先生編

定價金四拾五錢

郵稅金六錢

アピノオナルガルン

九二五橋新話電樂社商共區地番三十町市京川東竹

會 告

本月九日午後一時半女子高等師範學校附屬幼稚園に於て第卅九常會相開き候間萬障御緑合せ御來會相成度候

追つて當日は先般歸朝せられたる岡田光子君の演説有之筈に候

明治三十八年十二月五日 フ レ ト ベ ル 會

●ふ乞を記附御旨るた見を(供子と人婦)は節の文注御●

●々津味趣てにし益有●

「ふつ母さん昔離を聞かせて頂戴」!とは毎晩可愛い子供たちの口から聞く所であります。この書物は子供達の此無邪氣な請求に應する爲に出来た教育お伽噺を集めたるものであります。西洋諸國では、家庭教育のために、母親の読み物としてこの種類の書物は澤山あります。が殘念なことは、我が國ではまだ見当りませんでした。この書物は著者がいろいろ西洋の書物中から探し出してこれなら子供たちに聞かせて、面白くもあり、可笑しくもあり、爲めにもなり、教訓にもなるといふ種類のお噺を數十種集めて出来たのであります。

お噺が主でありますが、中には所々に面白い子供の手細工や家庭の遊戯や唱歌なども入れて、美しい繪なども澤山ある。どうか、家庭では子供たちの爲に是非一本を備へなさい! 子供のある家庭へは是非一冊を送つてお上げなさい! 又學校の先生方は子供の教へ草として、何冊も學校に御備へなさい!!

●口繪鮮麗三色版 (岡田三郎助先生筆)



和装美本全一冊
定價金六十錢
郵稅金八錢

東神京田兌發

○大賣文館同稻早阪市後備支館文

●卷中挿畫數十箇何れも絶代の奇品!!!